

小川原湖周辺地域における縄文早期貝塚の一樣相

—青森県三沢市山中(1)貝塚発掘調査成果から—

青森県教育庁文化財保護課 齊藤 慶吏

青森県では、縄文時代早期前葉（日計式期）以降に竪穴住居跡等の遺構の検出率が増加しはじめ、早期後葉（赤御堂式期）には墓の構築や支柱の明瞭な竪穴住居跡が現われる。また、石器組成では、早期中葉（白浜式期）以降に磨製石斧と敲磨器類の比率が上昇しており、木材と堅果類を中心とした森林資源利用の活発化がうかがえる。こうした定住活動の痕跡とみなせる考古学的な諸要素の発生・増加と連動して、小川原湖周辺地域では貝塚が形成され始める。

本県の太平洋沿岸部の八戸市から小川原湖周辺にかけての地域は、県内最大の貝塚密集地として知られ、特に縄文時代前半期の貝塚が多く存在する。貝塚以外にも縄文時代早期から前期初頭にかけての集落遺跡の調査が数多くなされており、居住様式の変遷を検討する上で好条件を備えている。また、近年は北海道・北東北最古となる縄文時代早期中葉（ムシリI式期）の貝層が検出された三沢市野口貝塚、早稲田(1)貝塚の他、縄文時代早期後葉（早稲田5類期）の山中(1)貝塚でも発掘調査が進められており、新たな知見が得られている。

本発表では、二〇一八年八月に青森県教育委員会が実施した三沢市山中(1)貝塚の発掘調査成果について報告を行い、同地域の縄文時代早期貝塚の一例を提示する。あわせて、同時期の集落遺跡について、構成する遺構の内容や出土遺物の組成から比較検討を行い、集落の継続性や集団の定着性について考察を行う。